

## 夏目漱石『それから』研究

——代助と周囲の關係變化について——

### 序

日本近代文学を代表する作家の一人、夏目漱石が遺した作品群の中に、『三四郎』『門』と並んで三部作と称される小説『それから』がある。主人公は大学卒業の肩書きを持つ二十九歳の長井代助である。学生時代に旧友・平岡常次郎に頼まれ、旧友の菅沼という男の妹の三千代を、「義侠心」(十六、484)から平岡の妻として「周旋」(八、214)した過去を持つ。

代助は明治の良家に生まれ、「約一年余」前に「一戸を構へ」(二、32)独立したと書かれている。独立と言っても無職であり、父と兄から月々の生活費を無心して高等遊民の日々を送り、使用人として「門野という書生」(一、12)と「従来からいる婆さん」(一、14)の二人を住まわせている。実家からは父や嫂の梅子が縁談を次々と勧めている

### 新 谷 あゆみ

が、「相手にけちを付ける」(三、75)ことでかわしている状態で、これらの縁談から距離を置きたかったのも別居の大きな理由だろう。

彼は浮世離れした生活をしているせい、起床時に「寐ながら胸の上に手を当てて」心臓の鼓動を確認する癖を持ち、自分が生きている事実を実感するのが「近來の癖」(一、6)である等、彼独特の世界を持つ。自分の世界に籠って就職や結婚を拒み続けている代助だが、物語の進行と共に平岡から三千代を奪う決心をする。結果、実家から援助を打ち切られ、最終的には自己理念を捨てて自ら社会の中へ、狂気の餓に頭を焼かれながら飛び出していくこととなる。彼がこうなるに至った結果には、一体何があったのか。大きな原因となった三千代と平岡と、代助との關係變化を考察していきたい。

## 第一章 代助と三千代の関係

### 第一節 三千代の接近

三年前に就職のため故郷を離れていた平岡が、会社の金を不正に使用したために解雇されて帰京してきた。代助が職に就かず優雅に暮らしているのを知った平岡は彼に嫉妬し、親友同士であった二人の仲が陰悪な方向に進み始めた。元は親友だった彼らは「中学時代」(二、30)から互いに尽くし合い、その極点が代助による三千代の「周旋」であったが、代助は友人の幸福のためにも、自分の満足のためにも良いことをしたと思っていた。しかし卒業後、社会人と高等遊民に立場が変わったとき、平岡には「得意の色が浮かび」、代助には「憎らし」(二、31)という感情が芽生えることとなった。

そもそも代助は生きる術である労働に対して「劣等」だと思い、「馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもう駄目である」と、「平生から考えて」(十三、336)いる男である。この信念では、社会に出て働かざるを得ない平岡と後に衝突することは必至であり、たとえ平岡が成功していたとしても、代助に勤労を馬鹿にされて憤ることは避けられないはずだ。したがってこの二人は、被扶養者の間は親

友同士でも、学生の肩書きが外れた途端に自ずと溝が出来る運命だったのである。

一方で、かつて親友に「周旋」した三千代が、帰京後、代助に接近を始める。菅沼が代助に「*arhier elegantiarum* (趣味の判定人)」という「異名」をつけた学生の頃、「三千代は隣りの部屋で黙つて兄と代助の話を聞いて」おり、*arhier elegantiarum* と云ふ字を覚えた」(十四、410)ほど、代助の話を熱心に聞いていた過去がある。学生時代から代助を思い慕っていた三千代は、彼の気持ちが自然と自分に向かうように、さりげなく近づいていくのである。

代助からすれば三千代は、恋愛対象ではなく親友の菅沼から託されたもの、半ば自分の所有物のような人物だっただろう。結婚はしなくとも彼女のことは好きにして良い、程度の認識である。しかし平岡のもとへ遭つた後に、平岡が誇らしげにしていただけに惜しくなり、執着心が芽生えてきた。代助にとって三千代は、友に譲渡することになめらいはなかったが、手放してしまったことで未練が芽生え、心に訴えてくるような存在となっていた。

三千代は前述の通り代助が好きであったが、その代助の斡旋で愛情の持てない平岡と添うことになり、産まれた我が子はすぐ亡くなってしまうた。そのせいで「心臓を痛め」

(四、94)、子供を産めなくなった自分を放り出して夫は「遊び始め」(八、203)、拳句に会社で不祥事を起こして解雇され、金銭面にも苦勞する生活を強いられている。これに對して、三年ぶりに邂逅した代助は三千代にとって、恋愛の対象としての可能性もあり、生活に支障のない金銭も有している都合の良い人物であった。妻子もなく金銭にゆとりのある代助は、自分を幸せにしてくれるかもしれない。三千代は代助に、愛と金とを自発的にくれるよう暗に接近を掛けるのであった。

生活費に困窮している平岡が帰京後まもなく、借錢を「三千代に云い付けて代助の所に頼みに寄した」(四、101)。この時三千代は手を組み、「下にした手」と「上にした手」(四、96)両方に指輪を嵌めているが、上の指にしているものはかつて結婚祝いに代助が贈った、真珠の指輪であった。この指輪をした手をもう片方の、結婚指輪が嵌っている手に重ねるといふ作爲的な仕草をしてみせる。通常、指輪を男性が女性に贈るとは求愛の意味に他ならないが、代助は贈り物をした当時三千代への恋愛感情はなかったため、深い意味はなく指輪を選んだのだろう。しかし三千代からすれば、意中の男性から贈られたのだから大きな意味を持つ指輪である。

この場面では代助は三千代の意図にさほど心を動かされず、彼女の仕草は失敗に終わったように見える。しかし平岡が再就職したというのに生活費を家に入れず、三千代の暮らしは益々困窮するものとなった。代助が夜訪ねて行く<sup>310</sup>と三千代は新聞を読んでいて、これは「二編目だと」(十二、310)言った。新聞を再読するほど彼女は暇を持て余し、平岡に相手にされていないことが分かる。代助が家庭の経済状況を聞くと、三千代は手を見せて、「代助の贈った指環も、他の指環も穿めてゐなかつた」(十二、311-312)様子を示した。指輪を二つとも質に入れてしまったのだ。代助はその場で「紙の指環だと思つて御貰いなさい」と金を渡すが、ここでは女性に指輪を贈ることの意味を彼は理解している。「指環を受取るなら、これを受取つても同じ事」(十二、312)だと金を手渡すが、要するに指輪が金に化けただけであり、これを贈ることで三千代の気持ちを惹きつけようとしているのである。三千代を救済したこと、家に生活費を入れない彼女の夫より優位に立てたことに、代助は満足した。三千代に惹かれる一方、平岡との確執が深まっていく代助は、平岡に對して三千代の夫にふさわしくない、認めたくないという思いが募っていた。しかもここで、平岡が三千代を氣に掛けていない、言い換えれば彼女は所有されていない

ことが判明した。代助が生活費を出してやれば、平岡は遊び回る状態が続き、妻の三千代と過ごす時間が更に減少する。代助は生活費を渡してやることで、三千代に対する平岡の非所有の時間を買っているのだ。平岡宅を辞する帰途、代助は金を渡せたこと、そして平岡が三千代を自分の所有する妻として思っていないことに対し「美しい夢を見た様に」(十二、313)上機嫌だった。帰り際に「平岡君よろしく」(十二、313)と挨拶をする余裕も見せたが、実は三千代の思い通りに動いた件には一切気づいていない。三千代が代助から贈られた指輪を嵌めた手を上に重ねたのは小さくて静かな、しかし強い意思表示だ。彼女に指輪を贈った事実を代助に再認識させ、指輪を質入れするほど困窮した時に、まとまった額を代助から受け取ることが出来たのだ。どう振舞えば代助が工面してくれるか、三千代は計算した上で、指輪を持つべき意味と自分の経済状況を代助にアピールしているのである。

三千代は金だけではなく、もちろん愛情も欲している。彼女の不幸には、金銭問題や冷え切った夫婦関係に加えて子をすぐに亡くしたこともある。初めて出産し、短時間とはいえ母となった三千代はその喪失を大いに悲しんだだろう。平岡も父として心を痛めただろうが、その感情は三千

代ほど長く持続しなかった。今や三千代が作った子供服を見せられても「早く壊して雑巾にでもして仕舞へ」と冷たく言い放つ。三千代が「貴方の方と同じに拵へたのよ」と言っても、来ている服を見て「是はもう不可ん。暑くて駄目だ」(六、149)と、子への未練が窺えない台詞を続ける。我が子を亡くした件でも、三千代は夫と気持ちいが分かち合えなかった。だが子の服を平岡に見せたのは、代助が平岡宅に上がっていた時のことである。そこへ三千代が子どもの服を持って「行李の底を見たら有つたから、出して来ただんです」(六、148)と現れるが、会話に突然入り込むようにで不自然だ。来客中に取えて夫に見せる必要があったのだろうか。

これは、代助が家に来ているからこそとった行動だと考えられる。三千代は平岡が我が子に関して興味のない発言をするのを予期して、その様子を代助に見せつけたのだ。夫は亡くした子にも愛着がないと代助に見せ、不幸さを演出するためにわざわざ出してきたのなら、三千代は相当な策士である。子を失い、夫の家族愛もなくしつつあるが、それを逆手に取り代助への武器としたのである。三千代は自分が哀れな女であることを強調し、代助を惹きつけようと努めていたのだ。

三千代の意図的な行動で代助の同情心と仄かな愛は募りゆくが、愛情が決定的なものになるには時間がかかった。「金を貸して満足させたい」と思っているが、「歓心を買

ふ目的を以て、其手段として金を拵へる気は丸でな」(七、174) という親切心で貸してやるのであり、代助に政略的思惑はない。嫂の梅子に平岡夫婦の生活費を無心して断られても、「働いて自ら銭を取らねばならぬ」といふ決心は決して起し得ない」と思い、「代助は此事件を夫程重くは見えてゐな」(七、183) ののだ。しかしここで転機が訪れる。梅子に金の相談をしたその際に、彼女は代助に以前より父が話を持ち上げている「佐川の娘」との縁談を勧める。代助が返事を曖昧にしているのも、「誰か好きなのがあるんでせう。其の方の名を仰しやい」と梅子が尋ねると、代助は「どう云ふ訳か、不意に三千代という名が心に浮か」(七、187) ぶ。心の底では、代助は三千代を意識しているのだ。だがこの時はまだ「結婚に対しても、あまり重きを置く必要を認めてゐな」(七、184) いため、彼女の名は突発的に浮かんだだけである。女性の名を出せばこの場を切り抜けられるととっさに考え、無意識に三千代の名が浮かんできたのだろう。彼女が気に掛かっている、まだ縁談逃れに名前が出てくる程度の認識であった。だが彼女のさりげない接近に

加え、梅子から「好きなの」を聞かれ「三千代」と思いついてしまい、代助は彼女を意識し始めることになる。

## 第二節 平岡と代助の間の三千代

平岡夫妻に貸す金を梅子から送ってもらい、平岡宅に届けに行くと、在宅していたのは三千代一人であった。平岡はこのところ「善く怒る。さかんに人を罵倒する」それで、「昔と違つて気が荒くなつて困るわ」と「暗に同情を求める様子」で言う。だが代助は黙っているだけで何も言わなかった。

三千代はこの反応に手応えのなさを感じたのか、平岡が最近「性質の悪い金を借り始め」、「三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらくし出すと、遊び始めた」(八、205) と夫の悪行を話した。そして健気に「不親切なんぢやない、私が悪いんです」(八、205) と言ひ、「責めて子供でも生きてゐて呉れたら無可かつたらうと、つくぐ考へた事もありました」(八、206) と、自分が不幸な女であることを強調して見せた。黙つて反応しない代助を見て即座に次の手を考える、実に頭の回転が速い女性である。

これに重ねて、「中二日置いて」(八、206) 来た平岡の態度が代助を煩わせる。二百円の札に來たらしいが、それは

「君を煩はさないでも何うかなつたんだが、彼奴が余り心配し過ぎて、つひ君に迷惑を掛けて済まない」という「冷淡な札」(八、210)で、自分は無関係だと言わんばかりである。推測するに、代助に頼らねばならない状況が悔しい平岡は、三千代の独断で代助から借金したという話にしたのだろう。横柄な姿をしているが、真相は既に四章にて「三千代に云ひ付けて代助の所に頼みに寄した」と三千代の口から明かされている。よつて平岡は代助の前で、とうに暴かれていゝ虚栄心を晒すに過ぎなかつた。

三千代の独白と平岡の現状及び態度は大いに効いたようである、三千代への心配と平岡に対する強い不信が沸き、「代助は何処かしらで、何故三千代を周旋したかと云ふ声を聞いた」。同時に平岡も「ちらり／＼と何故三千代を貰つたかと思ふ様にな」(八、216)り、三千代が望む状態へと、事が進み始めるのである。

## 第二章 別方向からの影響

### 第一節 過去の喚起と雨

代助の淡い思いが大きく進展するのは、この後三千代が二百円の札に來た場面である。代助の眼前に現れた三千代は、学生時代と同じく髪を「銀杏返し」に結い、「手に大き

な白い百合の花を三本許提げて居た」(十、251)。これは菅沼が存命だった頃の、三千代によつて代助との思い出の姿と品なのである。「三千代が清水町にゐた頃」、銀杏返しに結っていたのを「代助から貰はれた事があつた」(十四、409)。代助としては軽い気持ちで社交辞令で褒めたのかもしれないが、三千代にとっては好きな男性から褒められた特別な意味を持つ髪型となつた。いつか代助が褒めた姿で、三千代は自分の魅力を印象づけようとしているのだ。持参した白百合も、代助にまつわる花である。学生時代、代助は「ある日何かのはづみに、長い百合を買つて」「谷中の家を訪ねた事があつた」(十、258)のだが、そこには三千代も居合わせていた。白百合を「三千代にも、三千代の兄にも、床へ向直つて眺めさせた」(十、259)が、三千代には代助が選んで買つて来てくれた特別な花であり、彼との思い出を共有するものとなつた。三千代はあの時と同じ白百合を携えて、代助に思いを寄せ、彼もそれを察していた過去を反芻させようとしている。

代助宅に到着して早々、彼女は強力なアピール行動をとつて見せる。三千代は「息を喘まして居」(十、251)で、「洋卓の上」の「代助の食後の嗽をする硝子の洋盃」を欲しがつた。「先刻僕が飲んだ」(十、251)と代助が言っている

ところから、既に彼が口をつけた後の飲み残しの水である。そのような水を渡せるはずもなく「水を庭に空け」(十、252)、代助は自ら水道水を注いでくる。しかし代助が部屋に戻った時には、三千代は先程の飲み残し洋盃で、「鈴蘭の漬けるある鉢」(十、253)から水を掬って飲んでいた。

彼女が鈴蘭の水を飲んだのは、本来の策が達成されなかった故の、やむを得ない変更策だったのではないだろうか。代助が一度口をつけた水と洋盃を欲したのは、所謂間接キスを本人の前で見せるつもりだったと考えられる。その水は庭に捨てられてしまい、代助も綺麗な湯呑と新鮮な水を調達しに台所へ立った。三千代は代助に戻る前に先手水を打ち、部屋に残されたままの洋盃で手近にあった鈴蘭の水を飲んだのだろうが、ここで鈴蘭の水を使用したことに着目する。三千代は鈴蘭の水を飲むことで、花と自分のイメージの一体化を図ったのである。清らかで可愛く、短命で儂い命の鈴蘭と同化し、花の如く可憐で清い女として身をやつして見せたのだ。花の清らかさも重要で、三千代は子を産めない、性と離れた女性である。代助は性的なものに嫌悪があり、自分の足を見て「見るに堪へない程醜いもの」(七、168)だと考えている人物だ。子を産めない三千代は代助の感覚に叶う、性と離れた女性であり、代助が

熱を上げられる条件の一つとなっている。代助は三千代が鉢の水を飲んだ様子を理解したため、彼女の策は当初と少し形が変わったものの、成功したのであった。

三千代の行動に少なからず衝撃を受けた代助は、すぐさま取り繕って彼女の体調と心臓を尋ねた。三千代はこの言葉でさえその場でチャンスに変え、「悉皆善くなるなんて、生涯駄目ですわ」と言いながら、「繊い指を反して穿めてゐる指環を見」(十、256)るのだ。この指輪は代助が婚姻祝いに贈ったものに他ならない。そしてさりげなく自分が不治の病を患っている発言をし、短命であることと薄幸さを訴え、指輪を見て代助に救いを求めて見せる。

代助は「静かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きながらる男」だと自負している反面、死の世界という未知なるものに戯れで触れることもする。代助は「時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此処を金槌で一つ撲されたならと思ふ事がある」(一、7)というが、本当に心肺停止が怖いならば、そのようなことを始終考えたりはしない。毎日を徒然に過ごす代助は、生と死に思いを馳せる時間的及び心的余裕があるらしく、死の淵を怖々覗いているかのようだ。「まだ大病と名のつくものを経験しなかつた位、健康に於て幸福を享けて」(十一、268)いる代助に対し、三



千代の薄命を訴える台詞は効果絶大である。三千代はその点も承知の上で、演出効果を狙っているのだ。

当人が気づかないまま三千代の思い通り、代助を惹きつける効果が現れてきていた。だが代助には相手が人妻だという常識や理性が残されており、三千代を何とか過去から遠ざけようと試みた。百合の花を前にした三千代が「自分の鼻を、弁の傍迄持つて来て、ふんと嗅いで見せ」ると、「さう傍で嗅いぢや不可けない」(十、257)と彼女を制止して百合と過去から引き離そうとした。さらに「西洋鋏」を持ち出し、茎を乱暴に切つて「鈴蘭の簇がる上に」(十、258)放り込んでしまう。三千代との仲がこれ以上変化及び進展しないよう、代助は理性と行動で、三千代へ惹かれていく自分を諷めようとしていた。

しかしここで、代助の心を決定的に三千代へと向かわせる、最大の要因が訪れる。それは三千代の訪問以前より降っていた雨が、「益／＼深くなつた」ことだ。「世の中の浮いてゐるものは残らず大地の上に落ち付いた様に見え」、「代助は久し振りで吾に返つた心持がした」(十、260)。この瞬間、代助は今の自分が三千代を好いていると冷静な頭で自覚したのだ。代助は雨天の日には頭が冷静になり肝が据わるようで、物語における重大な決断や行動を取る場面で

は、常に雨が降っている。三千代と生きることを選び、実家に「佐川の娘」との縁談を断つた時は、前の晩から「雨が又ざあ／＼と降」(十五、435)り、当日も「小降り」(十五、436)であつた。また、一度目に家に断りを入れに行つた際は「二三日凄じく降つた揚句」(十四、380)で、雨上がりの日であつた。雨が降っている、あるいは雨が上がつたばかりの日に、家族と離縁する可能性を含んだ決断を伝えに行つたのである。

このように、物語中代助は雨天の時に重要なことを実行する。白百合を携えた三千代と会い、動揺していたところへ雨が激しくなつたため、彼は冴えた頭で思いを認識するに至つたのだ。遂に代助は、三千代の努力と偶然勢いを増した雨によつて魅了されたのである。これこそが三千代の計画に力を貸し、彼女は自ら動くことなく臨機応変に策を練り変え、代助を自発的に動くよう誘導して彼女の目標地点へと誘い込んだのである。

## 第二節 三千代を引き立てる「佐川の娘」

三千代に惹かれ始めて困惑する代助のもとへ、更に彼女を意識せざるを得ない事態が訪れる。実家が以前から推している「佐川の娘」と、半ば強制的に「会談」させられる



のだ。「華やかな色調の反芻として、三千代の事を思い出さざるを得」(十一、298) ない代助にとつて、「華やかな特徴」(十二、323) を持つ「佐川の娘」は三千代と正反対の女性に映ったのである。その上彼女と会談した結果、この「令嬢」(十一、294) は代助の持つ趣味を悉く嗜まないことが分かった。「音楽は、始めは琴を習つたが、後にはピアノに易へ」(十二、325)、「ヴィオリンも少し稽古したが」(十二、326) すぐに止めた。「芝居は減多に行つた事がな」(十二、326) く、梅子が「小説は御読みになるでせう」と尋ねても「いえ小説も」と「令嬢」は否定し、英会話も苦手である。代助は逆に「両方の指をしばらく綺麗に働か」(七、176) しピアノを弾ける名手で、芝居も「歌舞伎座」(十一、288) を初め好んで見物に出ている。更に文学者である寺尾に、「是を訳さなけりやないんだ」(十一、275) と頼まれるほど語学堪能で、「洋書」(四、81) を積極的に読むことを趣味としている。つまり「佐川の娘」は代助の趣味をまったく理解し得ないことが判明したので。一方、三千代は、「沈んでゐる」のが「此女の特調子」(四、97) で、代助は「沈んだ落ち付いた情調」(五、106) を好む。趣味に関しても理解があり、「趣味の教育」を「固より喜んで彼の指導を受けた」過去も三千代は持っている。この二人の女性は、徹

底的に対照的な存在として描写されているのである。代助は三千代を気に掛けているタイミングで「佐川の娘」に出会つてしまい、彼女との落差が三千代をいっそう魅力的に映したので。

そんな中、代助の心を駆るように平岡が三千代を鬱陶しがり始めた。三千代が隣室にいるというのに、「僕も一人なら満州へでも亜米利加へでも行くんだが大に妻帯の不便を鳴らし」(十一、281) たのだ。その妻を「周旋」した本人を目の前に堂々と文句を言い、平気な顔をしている。こういった平岡の態度が、この男は三千代の夫にふさわしくないという思いと、三千代への憐憫を増していく要素となるのだ。

代助が十二章で金を三千代に渡した後、彼は三千代に引かれるように家を訪ねるが、「平岡の机の前」に置いてある「紫の座布団」(十三、343) を見た代助は「一寸厭な心持」(十三、344) を感じる。座布団の主は家の主で、やはり平岡は三千代の夫なのだという事実が不愉快だったのである。しかし代助が告白後に三千代のもとを訪ねたとき、三千代は「わざと平岡の机の前に据ゑてあつた蒲団を代助の前に押し遣」(十五、431) る。「蒲団」とはあの「紫の座布団」に他ならないだろう。夫の座布団を代助に勧めているのだ

から、自分の夫はあなただと暗に伝えているのは間違いない。以前代助がこの座布団を見て不愉快になったことに氣付き、その理由も理解しての行動なのだったら、三千代の観察眼は卓越している。

三千代は代助から渡された金を平岡に知らせておらず、代助も「三千代の腹の中に、何だか話し悪い、或蟠りがあるからだ」(十三、345)と考えていた。しかし三千代が金の件を平岡に言い出さない一番の理由は、自分と代助の目が知っている、二人だけの秘密として特別性を持たせるためだろう。金のことで秘密を共有し、二人の接点を強力にしようとしているのだ。そして三千代は、恐らく本心であろう「何だつて、まだ奥さんを御貰ひなさらないの」(十三、350)と尋ねるが、この一言は代助の妻というポストが空いていることを、彼自身に実感させる働きをしたのであった。

### 第三節 書き換えられる過去

代助はそれまで、「代助の三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつゝある事」を冷静に理解していたのだ。「三千代が平岡に嫁ぐ前、代助と三千代の間柄は、どの位の程度迄進んでゐたかは、しばらく措くとして」(十三、347)と、代助が具体的事例を探さないよ

うにしていることから、二人は互いに愛情を向け合った過去がないのである。ところが先程の三千代の言葉を聞いた代助は、「二人の過去を順次に溯つて見ていづれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さない事はなかつた」と過去を書き換えたのだ。三千代に発展させられた自分の感情を正当化し、二人の愛は疑いないものだと思ひ直したのである。

三千代に心を奪われている代助に更に追い討ちをかけるように、平岡が「家庭もあまり下さつたものぢやない。家庭を重く見るのは、君の様な独身者に限る様だね」(十三、364-365)と、家庭を否定する心境を露呈した。これを聞いた代助は初めて、「そんなに家庭が嫌ひなら、嫌ひでよし、其代り細君を奪ちまうぞ」(十三、365)と本心を強く意識した。代助の中の平岡は、三千代の夫に適當でない存在として決定されたのである。この瞬間代助は平岡との過去をも作り変え始めた。学生だった昔、代助と菅沼と三千代の「三人は斯くして、巴の如く回轉しつづ月から月へと進んで行つた」(十四、412)と、四人で行動していたはずの過去から平岡を抹消し、友人としても認めなくなつたのである。そして代助は三千代を自宅に呼び、思ひを伝えるに至つた。告白という代助にとって重要な決意を実行するこの場面で

は、前述の法則の通り雨が降っている。前日の「夜半から強く雨が降り出し」(十四、400)、三千代が代助宅に訪れても「雨は依然として、空から真直に降つて」(十四、404、405)おり、代助は雨天に後押しされ、三千代に思いを打ち明けたのであった。

代助と三千代の関係が変化したのは、決して自然なものではない。代助自身は三千代に覚えた愛を「天意としか考へ得られなかつた」(十三、374、あるいは「自然の愛」(十三、336)だと感じているが、紛れもなく天の意思ではなく三千代の意志であり、「自然」の愛を持っているのは彼女の方なのだ。

代助の運命は、平岡と三千代との関係変化で大きく変わったが、いずれか片方のみでは起こりえなかつた。代助と平岡、代助と三千代の二組の関係が変化し、それが互いに共鳴しつつ代助の人生に影響したのである。

腹を括り三千代に告白して、「云ふべき事を云つて仕舞つた」後は一度は平穏が訪れたように見えた。しかし実家に「佐川の娘」との縁談を断ると事態が急展開し、父に生活費途絶を宣言され、職業を探さなければならなくなつた。三千代は「強い神経衰弱に罹つて」(十六、474)倒れ、「絶交」(十六、485)を決めた平岡が三千代と会わせないようにする

ことで彼に復讐し、代助の所業全てを長井家に暴露して家族を失望させたのだ。

社会人とならざるを得ない状況に立たされ、平岡の復讐によつて家族の援助を完全に失つた代助は「仕舞には世の中が真赤になつた」(十七、502)と頭を焼け付かせながら職業を探すため街へ飛び出し、『それから』は終わる。彼のその後は不明で、人生が狂つた代助の最後とは何なのだろうか。

### 第三章 代助と三千代の行末

この物語の結末とは、代助と三千代の死なのではないかと推測される。三千代の具合は、「さう軽さうでもない」(十六、466)らしく、それを代助に伝えている門野は「白地の浴衣」(十六、465)を着ているが、心配する代助の前に、「門野のぼんやりした白地」(十六、466)が再び現れる。『それから』は衣服の描写が乏しい小説で、百合の花を持参した三千代は相当気合が入つたよそ行きを着ているはずだが、地の文は何を身に着けているのか最低限の説明しかない。それにも関わらず、三千代の病を知る場面では門野の浴衣が白であることを二度も書いている。この白い着物の正体は、死に装束を現しているものと推測される。心臓病で倒

れた三千代の行先を、暗に示しているかのようだ。

そしてもう一人、代助にも死は訪れると考えられる。彼にも、死を暗喩する描写が度々付きまといっているのだが、彼の場合は、肉体的な死ではなく個性の死である。

死の暗示は、夜の電車の形でやって来た。「停留所」で立っていると、「遠い向ふから小さい火の玉が現はれて、それが一直線に暗い中を上下に揺れつ、」電車が到着する。車両のライトが「上下に揺れ」るなどありえるのだろうか、まるで人魂が来たかのような描写である。乗っていたのは「黒い着物」の「車掌と運転手」のみで、乗車した代助は「どこ迄も電車に乗つて、終に下りる機会が来ない迄引つ張り回される」と感じた。ここで「車掌と運転手」の「黒い着物」に注目する。黒い衣装の二人に「挟まれて」(八、189)長方形の箱に乗り、下りられない心配をしている代助は、喪服の男性に棺桶で運ばれているかのである。この不気味な電車の場面が、既に彼の死を仄めかしていたのかもしれない。

代助は死に関して、「もし死が可能であるならば、それは発作の絶高頂に達した一瞬にあるだらう」と認識していた。終盤、三千代との関係を平岡に打ち明けた際、平岡に「僕は是から先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だ

と思つてゐる」と言われた途端、代助の態度が豹変する。「三千代さんの死骸丈を僕に見せる積なんだ」と言いつつ、「眼のうちに狂へる恐ろしい光」(十六、487)をちらつかせた。この時、代助は確実に「発作」(十六、488)が来ている。ならば彼にはこの瞬間、死が訪れたことになるのだ。発作を起した瞬間に死ぬと自分で考えていたのだから、ここで代助は死んだこととなる。

その頭で資本主義社会へ飛び出していったことも、長井代助にとっての死だ。高等遊民ではない一人の労働者となった時、厭世的で俗世間を馬鹿にしていた『それから』の主人公はいなくなってしまうのである。

## 結 び

代助にとって、平岡との関係が崩れるのは必然であった。職に就かず自分の世界で遊び暮らす代助は自己正当化のために労働を軽蔑し、労働者である平岡は会社を追われ、代助の境遇に嫉妬した。この二人がいつまでも友情を保持可能かなど、既に分かりきっている。三千代は代助を好いたまま平岡と結婚し、夫の失敗と家庭への愛情の喪失という憂き目を見る。彼女はその状態で未だ独身かつ裕福である想い人に再会し、本来嫁ぐはずであった代助に接近し

た。三千代は強い意志と策略の才能を持ち合わせる女性であり、彼女が平岡を離れ、代助にアプローチを掛けたこともまた、必然だった。そして結婚願望のない代助を自分に夢中にさせることに成功したのである。

彼が三千代に愛情を持ったのは、三千代自身の計算された接近によるもの大きい。だが互いに亀裂が深まる平岡に対して三千代はふさわしくないと感じたことや、実家から勧められた「佐川の娘」が自分にそぐわない相手であったことも、相乗効果となつて代助を駆り立てた。その結果人妻を奪おうとし、名誉を重んじる実家に縁を切られた。

代助の運命は最終的に狂つたのではない。「佐川の娘」との縁談を持ち込まれる長井家に生まれて、平岡や菅沼、三千代といった特定の友人と人間関係を形成した時点で、運命が既に定まっていたのだ。友人たちや家族との関係が変化した先にあったのは、物語の主役としての死だった。自分の世界を失い、ただの一般人となつた代助はもう、『それから』の舞台に上がることは出来ない。

注

(一) 佐々木英昭注釈『漱石文学全注釈 8 それから』若草書房 2000年6月30日 以下、(一)内の漢数字は同書の章、算用